

2003  
09.01

Vol.59



社団法人日本建築家協会  
The Japan Institute of Architects

# NAGANO

<http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/>

## -KEN CLUB

JIA 長野県クラブ

### 「真のグローバリズム」 副会長 依田 政司

JIA長野県クラブの会報も、年間の発行回数を減らした為に、およそ二年ぶりの巻頭の指名である。とは言え、書きたくてウズウズしていたと言う訳ではなく、先ずは、今年2月に行われた「保存問題長野大会」が盛会裏に終わった事と、会員・賛助会員の御協力に対して、改めて深甚なる謝意を表します。



さて、前二回は「中心と周縁」、「開発と再生」といった二律背反する概念を、どの様に調和させるかが、現在の建築家に課せられた重要な職能の一つであると、述べました。今回は「保存問題長野大会」で大活躍された、自ら「ローカリスト」を名乗る川上さんが提唱する「ローカルと平明さに徹することが真のグローバルである」という言説について、私なりの考えを述べてみたいと思います。

私は、目指す建築の地平は違っていても、川上さんの個性に富んだ人間性に惹かれ、こういう考え方にもシンパシーを感じます。実は「バブル経済期」の前ごろ、先進的な思想家たちによって「地方の時代」が声高にいわれた時期がありました。この一連の言説の主たる考えは「多元的な社会・多様な価値が共生する社会の実現」という事になります。

建築の世界では、バブル経済の追い風もあり、「ポスト、モダン」「デコンストラクション」が主流となっていきました。その後バブル経済がはじけ、世界ではソ連が崩壊し、アメリカ一極集中の時代がはじまりました。それが今まで続き、日本経済は相変わらず立直らない状況である事は周知の通りです。

米英の保守的で主流派の思想家は、「米英の考え方や制度を、スタンダードとして世界が受け入れれば、世界が平和になる。」と本気で言います。これがマスコミが喧伝する現在の「グローバルスタンダード」「グローバル化」の正体です。鯨を食らう民族は野蛮だといって捕獲させません。その為、鯨が増えて小魚が獲れなくなりました。経済的に無理だといって京都議定書にサインしません。同じ様うに一元論者の誇り高きイスラムに対しては、言うことを聞かないからと、空から爆弾を落とします。最近TVで人が死ぬところを見ないと、パイロットは罪の意識が全然無いという事を知り、憮然としました。

一元論は同じ考え方の共同体であれば、平和であり幸福です。しかし残念ながら人間の世界は多様なのです。一国が繁栄しつづける事は絶対にありえません。歴史がそれを教えている。「人間が生物として生きていくために地球環境を護って行こう。」とか「人間だから殺し合いを

しては駄目だ。」といった事はグローバルな課題として考えて行かなくてはならないですが、多くの課題は地域の歴史や文化といった多様な価値を互いに尊重し、折り合いを付ける社会が平和で幸福な社会であるといえます。

さて、話を建築の世界に戻すと建築の世界も当然多様であり、地域の固有性は尊重されなければ成らない筈です。ところが「モダニズム」は、世界中の貧しい人達にも人間らしい生活をさせてやりたいという善意から、スタンダードとなる教条を宣言したのでした。それが人類にとって福音となった時期もあり、輝かしい成果もあったのですが、「建築」は大戦後資本主義に籠絡され、経済活動の道具と成り下がってしまったのです。特にいまだわが国においては、真面目な建築家の創作活動を社会全体の経済活動の一部に過ぎないという考えが経済学者のなかに根強くあり、金銭の多寡による設計者選定が善であるという根拠になっています。公共建築だろうが、民間建築だろうが建築家の創作が変化する筈が無いですか。現下の「設計者選定問題」が発生した原因の多くは、発注者側の「建築」に対する認識と、地域住民が公共施設にどんな想いを抱いているかという事に、全くの無関心であった事によっています。

私は、「JIA長野県クラブ」は地域住民の公益の為に存在すべきだと常日頃思っています。「設計者選定問題」特別委員会においては、今後地域住民や他の分野の識者との議論を深める必要を訴えます。その際、敢えて公共建築に距離をおいて活動している川上さんの冒頭の言説の意味する処を含んで欲しいと思っています。



# ～特集～

# 公共建築の設

昨今話題の「公共建築の設計者選定」について、みなこ

## 長野県電子入札制度最低札応札を初めて経験して!! 懺悔 ————— 倉橋 英太郎



私は、本来、設計入札制度に大反対でした。

しかし今回、長野県発注の、松本蟻ヶ崎高校体育館実施設計で、初めて最低札の落札率40.1%で初挑戦してしまったのです。しかしその上応札したが、失格と、何ともお粗末な結果でした。今回の「本音を語ろう会」で申した通り、皆さんもご存知の通り、中々今迄のからみで応札出来ない理由から、今回の私の初挑戦になった事も一つの要因ですが、事務所開設21年となり、所員15~16人抱える中、今回の設計入札が、「倉橋さんが何故?」とか「何でこんな事をしたのか?」と多くの皆様から叱咤されました。

多くの理由は、今回私事ですが、長女が蟻ヶ崎高校を卒業して、武蔵野美大建築へ入学できた私自身の喜びと、その学校に対する御礼(親バカ)と、高校の卒業式に参列して、蟻ヶ崎高校キャンパスの体育館、その周辺空間のあまりの貧しさを、何とか修景させて頂こうと思った設計家の性(サガ)がした事でした。

しかし本来クリエイターとして、なすべき事でないと、JIAの皆様、私を叱咤激励して頂いた皆様に対しても、応札してみて「すまない事したな!!」と何とも言い難い後味の悪い思いがしてなりません。まったくバカな事しただと、反省しています。

そこには、高橋会長が語る会でおっしゃった「安く良いもの」でなく「良いものを安く」の意識が私の中にあったのかもしれません、物づくり屋として、15~16人の設計事務所の主催者として、今回の応札

で、精神的に非常に苦痛の日々を送っています。

もし、仕事がとれたとしても、それで良かったのだろうか。決められた基本設計の中で、実施設計だけでどこまで蟻ヶ崎高校の生徒、そして先生等のニーズが反映されたのだろうか・・・等等、設計者と実際の施主の意志疎通がありません。これはやはり設計入札はおかしいの結論に達しづらざる得ません。それに今、公の立場、市民の立場からすれば、一円でも安く落札した方が良いという理論で、全国の自治体の公共建物の87%が競争入札を採用していると言います。バブル未期に次々と建てられた「箱物」や、繰り返された談合が残した負の遺産で、行政と建築家の双方に対する市民の眼差しは今厳しくなっています。そんな中、最近のQBS(資質評価方式)は、設計者を決める際に、時間と忍耐と手続きは大変ですが、具体的なプランも要求もなく、市民とユーザー、ゼロから話し合いながらやっていく事で、良いものが出来ると確信します。

今回の私の行為は、物づくり屋として失格!!しかし、今後、多くの若い建築家の皆様も同じ経験をしないよう、是非、発注システムを変えるべきだと思います。

今回の「本音を語ろう会」でもわかりましたが、同じ悩みが仲間の中でも多い中、是非、設計入札を止め、QBS方式、少なくともプロポーザル方式に切り換えて行く様、JIAとして行政に働きかけていって欲しいものです。

今回、「本音を語ろう会」は、大変勉強になりました。

ありがとうございました。

## 良い公共建築をつくる為の設計者選定問題について ————— 児野 登



長野県内の公共建築で思い浮かぶことは、良い建築が少ないことだ。

確かに設計者の問題はあると思うが、問題の多くは発注者にありそうだ。だいいち建築についての認識が違うのではと考えさせられることが多い。

先日の「本音を語ろう会」でこんなことも聞いた。ある地方事務所の建築担当官は「建築は社会資本ではない、まして設計は必要悪なのだから極力安いほうが良い」といっていた。何かの間違いのような発言だ。良い公共建築、まして街づくりや景観形成は夢のまた夢である。

公共建築の設計者選定を考え始めると、ややこしくなってくる。県の受注希望型入札開始を契機として、建築設計そのものについて発注者とともに考える機会を得られたのだから。建築設計について建築に携わる設計者はじめ市民や行政の間で「建築設計とは何か」という共通認識があるのだろうか。多分ないのだろう。

北川原温氏がプロポーザルで設計者に選定された稻荷山養護学校は、その発注内容はプロポーザルにもかかわらず実施設計のみで、43億円の工事費に対し設計料が5千5百万円のこと。どのような根拠で算出したのだろう。人間がやっていること、建築設計への理解が同じならこののような特殊過ぎる考え方ではてこないだろう。

何十年も続けて来たのだ。その間市民の為の建築が一部の発注者と業者(あえて)に弄ばれて来たのではないだろうか。

そしてバブル経済が崩壊し、右肩上がりの経済は終焉して建設業界全てを潤す程の仕事はなくなった。その後の10数年、何か社会的閉塞感が続く中、本当の意味で変革の時が来ているのだろう。建築が我々の生活や市民社会を本当の意味で豊かにする社会資本であることが理解される世の中が近づいている。そんな予感がする。タイミングとして今、JIA会員は元より本当に建築とそこに関わる人々が建築設計の社会的意義を考え将来の一里塚にしなければと思う。

今回、「公共建築の設計者選定に関する特別委員会」がJIA長野県クラブの中に立ち上げられたのを機に、さまざまな意見を行政や一般社会にぶつけてみようではありませんか。

特にこの委員会の中では、

①公共工事の設計者選定について。

②設計とは、設計者とは、設計料とは。

と大きく二つの項目で議論をし意見を集めなければとかんがえていきます。その延長線上にはJIA会員のあるべき姿も見えてくるのかも知れません。そして建築設計という仕事が市民社会にとって本当に意義あるものとし、プライドの持てる仕事にしていくうではありませんか。

第2次大戦後、経済的視点が先行し、長い間質より量のシステムを

# 計者選定問題について

## んを代表して4名の方にご意見を寄せて頂きました。



### 入札制度に代わる、新たな選定方法を・・・

御子柴 進

市民の財産であるはずの公共建築の設計者が、どうやって決められているのか、当の一般市民のほとんどは知らないまま、次々と公共建築が建てられ続けています。大方の公共建築が、実は入札制度（つまりところ設計料が安いところが良いという制度）によって設計者が決まっていると聞かされても、「アア、そうなの、それはまずいことなの？」と問い合わせる市民が、大多数なのではないでしょうか。それだけ一般社会にとっては、「設計者が誰で、どんな考えのもとに建てられたのか」関心がうすいのが現実にちがいありません。

でも、簡単な話、「富士山の絵」を手に入れようとした時、横山大観の画く「富士」と、河口湖あたりの土産物屋で売っている「富士」と、号数が同じだから同じ値段だと考える人は、ほとんどいないはずです。

それなのに、こと建築の設計となると、まずは無関心、多少は関心があっても、土建業の各決定事項は入札が当然と思われてきましたし、現に継続もされてきました。それは「発注者側の惰性と横並びの発想」「使う側の無関心、無批判性」そして「設計側の社会の財産を生み出す」という自覚の欠如（薄さ）あたりに起因するんだろうと、かねがね私は思っていました。

では、こんな現状をどう変えてゆけば良いのか考えた時、大きな壁の前に立ち尽くすような感が私にはあります。今までも、コンペやプロポーザル等、幾多の選定方法が鳴り物入りで採用され、それによって設計者が選定されてきたにもかかわらず、特に地方では、いつしか

それらの方法も形骸化され改悪化され、決して社会に良いかたちで根付いていないのではないかと思うからです。

それでも、現状を少しでも変えてゆく方向を探るとなったら、「できる限り入札による選定をやめる」訴えと「入札制度に代わる、ある程度簡便で臨機応変に対応できる選定方法」の道筋を創ることではないかと思うのです。

基本的には、入札全廃が理想なのでしょうが、すぐに全廃ともいきませんでしょうから、建設予定の公共建築にレベルを付けて、ある決まった技術力と時間ががあれば、誰がやっても同じになる業務に関しては、それこそ入札制度でも良いのではないでしょうか。

そして、市民の財産として、精神的にも物質的にも考え方抜かれるべき公共建築は、その質と規模と内容に応じて、コンペやプロポーザルやQBSといった多様なシステムの中で、臨機応変に対応できる選定方法の流れを創れればと思うのですが。（もちろん、その選定方法は、高い理想と、平等、透明性を基本にしながら、なるべく重装備にならず、わかり易く、扱い易いものでなければなりません。）

言うは易く、実際にそこにたどり着くには、高いハードルをいくつも越さなければならないことを重々承知で言うのですが、こうした新しいシステムがいつの日か出来上がり、どんなに小さな行政体でも「このレベルの建築はこの方法で・・・」と気軽に扱えるようになれば、公共建築のあり方も、ずいぶん変わるのでないでしょうか。



### 安くて良品質の建築をつくる？

高橋 重徳

我々建築業界を取り巻く状況は、日々厳しさを増してきている。まず、公共事業の削減と県の入札制度改革に加え、デフレ状況下での景気低迷により、民間企業の設備投資の抑制が続き、頼みの住宅建設も減少傾向にあると言われている。

こうした状況下に於いて、過去に経験したことが無いほど低価格での設計やコンサルタント業務、建設工事の獲得競争が官民を問わず展開されているのが現状である。

日本の高度経済成長期を支え、その原動力でもあった建設産業は、90年代以降のバブルの崩壊と共に、その一つの役割を終え、新しい方向でのスタンスを求められる様になった。その方向は、“建設産業構造の改革”と“インフレ経済からデフレ経済への転換”に対する適切な対応であろう。インフレ状況下では、建設産業も大量生産、大量消費を背景に、量的な充足を満たし、後半には質への方向を目指し、両方とも簡単に達成できるかの様な錯覚をしたかのように思われる。やがて現状の様なデフレ状況下では、もろくも質より低価格に捉われた環境の中で混迷を経ていている。

公共や民間を問わず、クライアントまで含めさらに我々まで、重要な価値観の喪失と不安感によって状況は一変した。しかし、もう一度

原点に戻ってそのスタンスを明確にする必要があるのではないだろうか？

また、インフレ状況下においては、我々やクライアント、更に公共も良品質のモノを求めたのは当たり前であった。では、デフレ経済だからといって低価格のみの追求の価値観で良いのだろうか？そんなことは無い筈だと思う。

“安くて良品質なモノを求めれば良い！！”という主張はあらゆるところで実際にある。しかし、我々のようなオリジナリティを求める性格の強い少量多品種的なモノ作りに当てはまるのだろうか？その答えは“出来ないことは無いが難しそう！！”安くて良品質なモノは既製品のみに存在することをしっかり認識し、我々は異なった明確なスタンスを自信を持って、社会にアピールすることから始めることこそ重要であろう。

今の状況は、我々もいざれ淘汰され、今後それが生き残りをかけ、何らかの方向性を明確にし、その適切な対応をせざるを得ない深刻な状態であろう。良品質の確保が重要であることの大切さを最優先に据え、“適正な仕様のもとに適正な価格を求める！！”ことにのみ我々の進む方向はあるのではないだろうか？

いつでも我々は『良品質の建築を安くつくる』ことに集中すべきだと思う。自信を持って頑張ろう！！

## 「本音で語ろう会」－公共建築の設計者選定問題－を特集して

西沢 利一

トピックスを入れて、5名の方々に、この難しい問題に取り組んで頂いた。各氏に心より感謝いたします。もう1名を予定していましたが、原稿が届かなかった。代わりの人を見つけることができた責任上、誌面を埋めなければならず、拙いですが、まとめとなりますかどうか……

“おせん”という講談社から出ているコミック本があります。老舗茶屋「一升庵」の女将の物語だが、これが又、艶っぽくておもしろい。この話のベースになっているのが、白洲正子である。“おせん”的母、大女将が白洲正子そっくり。正子の著書「日本のたくみ」、「遊鬼」、「夕顔」…とかが、手を変え、品を変えてくる。白洲正子は、薩摩の海軍人・樺山資紀伯爵の孫だが、裕福な(だった)実業家の白洲次郎と結婚している。正子は生涯を通じて、本物を求めた人である。

この“おせん”的ストーリーの骨格も、また“本物とは”が貫して描かれていて、経済一辺倒の文化を批判している。

ハンバーガーや、コンビニ製品の味付けの濃い食べ物で育った子供達に、素材の持つ本当の味がわからない。100円ショップ品や海外で作られたバーゲン品が、身の回りに溢れている今、物を大事にすることがなくなっている、等々……。

建築のことを言うと、ハウスメーカーの家で、脳味噌が味付けされた人達に、職人の心がわからない。実際、ハウスメーカーといつても、工事しているのは、下請けの零細企業が絞られてつくっている。半値の七掛けという話もあるが、当然既製品の寄せ集めになっている。こんな話も“おせん”出てくる。大工さんが、材料に目を通し、手間をかけて造る家が、そう安くはない。「坪いくらで、できます」とか、TVコマーシャルを打ち出しているメーカーも、自分で首をしめている。

そのハウスメーカーの営業マンに、「一升庵」で料理を出す事になっ

た。“おせん”は何をやったかと言うと、スーパーで買ってきたサシミの盛り合わせを、目の前で吉伊万里の青磁皿に、盛りつけて出す。その皿と醤油をつけてオプションです、と言って付け加える。しめて一万二千円也！当然その客は怒り出しが、 “おせん”は、あなた方がやっている商売は、これと同じだと言つて追い返すのだ。

井伏鱒二の小説に「珍品堂主人」というのがある。骨董屋の話だが、この珍品堂、秦秀雄のことだが、白洲正子とも親交があった。“おせん”にも度々出てくるが、ある大店の息子が、女性の茶の師匠に惚れる。結婚したい胸の内を示して、この師匠に茶を点てる。逸品とされる茶碗を珍品堂に頼むのだ。何回も名茶碗で点てるのだが、この師匠、飲もうとしない。ある時、珍品堂この息子を、屋台の骨董市に誘う。この中から自分の好きな物を選べと言う。あるカフェオレ・ボウルを見つけて、これで茶を点てる。師匠は前の茶碗は貴方ではない、これは貴方よ、と言つて飲んで呉れた。—自分の目で物を見よ！という事—大きな会社だから、実績があるから、売上が多いから、値段が安いから、……。設計者選定の時に、そんな目で見ていいんだろうか。人風や仕事を見て欲しい、本質を見て欲しい……。

この風景をどうしたいのですか、こんな大きなものが必要なのですか、まだ使えるのに本当にこわしてしまうのですか、こんなに安くてどうやってやるのですか、物を見る目がないから、判断するものがないから、安易に走る。楽はいけません、国民の税金を使つてはいるのですから。だからと言って、平等だということもない、悪い人もいるのです。たくさんいるのです、唯我独尊の輩が。

行政の枠の中で、小さくなつてはいけません。人に混じり、外に出ないと、本当の姿は見えてこないのですから。

## JIA長野県クラブの出版物ご案内 あなたの夢を建築家が実現します!!

信州で「家づくり」に情熱を傾ける建築家を一挙紹介!!

「設計を建築家に頼みたいが、敷居が高い……」とお考えのあなたに、建築家一人一人の「仕事」を写真と文章で紹介。家づくりの最良のパートナーに出会える一冊です。



・既刊本「愛と情熱の家づくり」定価¥1,429 ・既刊本「建築家とつくる家」定価¥1,429  
お問い合わせ・お求め

JIA長野県クラブ 長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内 TEL:026-232-3897

### 編集後記

秋風の気配を感じる頃になって、ようやく59号！

保存問題大会が終わったと思ったら、林雅子展。時間は風のごとく過ぎていきます。時間は命。

高瀬省三の流木彫刻「風の化石」のように、再び生命を吹き込まれ、何かの出発点になるのだろうか？……………西沢 利一

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

編集人／西沢利一

発行所／JIA長野県クラブ 長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内

発行人／松下重雄

TEL:026-232-3897 FAX:026-232-5303 E-mail:jia-naga@jeans.ocn.ne.jp